「パパラッチ（双葉社）」
2005年12月号～2006年6月号

『東陽片岡・カズキの新・巷説百鬼夜行』
バックナンバー

2006年6月号

平成 新・巷説百鬼夜行 巻ノ七 泥田坊

東陽片岡・カズキ(KAZUKI)の妖怪のような浪花のオッサンとオバハン

ワシや、カズや。あんたら田舎生活に憧れた事ないか？

ワシはある農家を取材した時に農業に憧れてしもうて住居を田舎に移そうとした事があったんや。長い間、気合の入った街、大阪に居ると魔が差すのかのう？

今回はその時の話や。

それは3年程前のことやった。さっきも言うたけど、ワシは取材で体験した農業が忘れられんで、近所にある浜田不動産の浜田っちゅう70歳をまわった爺さんに、賃貸で家付きの農地を探してくれと頼んだんや。浜田は元々大地主の息子やったんやが、親の財産を食いつぶし、今は親戚のアパートを管理させてもらって生計をたてとるそうや。

ところがや……。浜田は今でも地主の息子を気取り、普段着は紋付に袴や。おまけに趣味が詩吟に気功にヨガらしいわ。「何で気功にヨガが趣味なんや？」と尋ねたら、

「ワシは死ぬまで女を抱き続けたいんじゃ。そやから身体を鍛えている」

と、真面目に答えよる。

ワシは浜田の性格に不安を持ったんやけど「買物は近所でしろ」っちゅう、死んだ爺の遺言を守ったんや。

翌朝10時頃、ワシと浜田は兵庫県の山奥へ車で向かったんや。2時間程、車で走った頃、浜田が、

「そろそろ昼やさかい、そこのファミリーレストランでお茶でも飲んで行きましょか。それに間取り図や近隣詳細図も見せたいし……」

と、言いよった。ワシも、

「山奥に入ったら何にも無いやろな……。ほんだら今のうちに食事でも済ませますわ」

と、同意したんや。レストランに入ったワシは、

「ワシは、昼のランチにするけど、浜田さんは何にしまんねん？」

と浜田に聞いた。しかし、浜田は、

「私は霞を食って生きている。食物はいらん。ウォーターだけプリーズじゃ」

と、意味不明の事を言い出したんや。そればかりか、

「そろそろ昼の気功の時間や」

と言うと、急に席を立ち、両手を大きく広げ、

「ハフーーー」

と勢いよく息を吐き出したんや。

ワシは思わず他人を装ったで。なんせ、紋付袴のガリガリの高齢者が突然奇声を上げながら気功を始めたんや。店員は慌てて飛んで来よるし、他の客は見世物を見る目でこっちを見とる。

「止めてええや、浜田さん！なあ、霞よりうどんのほうが美味しいで」

「いらぬ。ホヘー」

ワシはこれ以上変な体操されたら何処かのインチキ宗教団体と間違われると思い、

「なあ、オゴルさかいに何か食べてえな。頼むわ」

と、食事をする事を強くすすめたんや。すると、浜田は、

「わかった。そこまで言われては仕方が無い。それではヒレステーキセット！」

と、一番高い料理を注文しよった。こいつカネが無いだけやんけ。ワシはこれから見

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメディアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に「平将門首塚の謎」(ジーオー企画)等がある。

【泥田坊】(所蔵:川崎市市民ミュージアム)
働き者の男が、死にものぐるいで耕した田を残し死んだ。ところが、自分の子供が怠けて、田を他人に取られてしまい、夜になると田の中から現れ「田を返せ」と唱ぶ、無念を残した妖怪。

食事も早々に終わらせた後、ワシらは目的地に着いた。

引っ越し期限は1週間だという山の神のお告げ

「どうや、カズちゃん。これがあんたに借りてほしい物件や。掘出し物やで」

浜田は嬉しそうに車を降りると、ワシを先導して一軒の家へ入って行ったんや。

「土地は300坪で建物畑付きの一戸建てや」

見ると築年数は50年程の憧れの農家や。ワシは、

「浜田はん、なかなかナイスや。土間も有るし、井戸も有る。憧れの農家やないけ。保証金と賃料はナンボや？」

「保証金は20万円で家賃は5万円や」

ワシは小躍りして喜んだ。

「安いの。ほんまにそれでええんか？」

「カズちゃんやから特別や。それに昼御飯にステーキをオゴッチくれたしな」

ワシはその日のうちに契約書に判をついて保証金と家賃1ヵ月分を支払ったんや。

「世話になったのう」

ワシが礼を言うて帰ろうとすると、

「ところで言い忘れ取ったけど、貸すに当たって一つ条件があったんや」

「条件？」

「そうや、出来れば1週間以内に引っ越してほしいんや」

「何でや？」

「山の神様のお告げや」

「お告げ？　何やようわからんけど……まあええわ」

ワシは承諾し、身の回りを片付けて6日後に引越しを予定していたんや。ところが、急な仕事で引越しが10日後になってしもうた。ワシは〝山の神さんにはお供えでもしたらええわ〟と、日本酒さげて物件に行って腰が抜けたで。なんと、そこには〝公売物件〟と大きく看板が出てたんや。ワシは慌てて浜田不動産に怒鳴り込んだ。ところが、ここはモヌケノカラや。浜田不動産の前で立ちすくんでいたら、通りがかった乾物屋のおっさんが教えてくれたわ。

「浜田はん、財産無くして4日前に夜逃げしたで。何やあんたも詐欺におおたんか？何人も一昨日から来てはるからな」

泥田坊という妖怪がおる。先祖の土地や資産を子孫が粗末にすると取り憑く、恨みの妖怪や。ワシには誰もいなくなった浜田不動産の暗がりに、浜田の爺さんの先祖の姿がハッキリ見えた。

2006年5月号

妖怪のような浪花のオッサンとオバハン

平成 東陽片岡・カズキ(KAZUKI)の 新・巷説百鬼夜行 巻ノ六 あかなめ

ワシや。「一(カズ)」や。春は新入学や祝い事の章なる季節や。祝儀や飲み会にと出費がかさみ、懐が寒い限りや。

そこで、ワシはカネ貸したまんまになっている友人からの金銭回収業務に勤しむ事にしたんや。金銭回収業務ゆうても、高校時代のボン友(親友)の矢島に5万円貸してるだけや。ほんでもこの時期、その5万円がきついんや。

――ワシは早速、矢島に電話したんや。

実は、矢島に連絡取るのは3年ぶりやった。矢島は当時から"あたりめ"というあだながあったくらい、ねちっこく理屈の多い男や。噛んでも噛んでもなかなか切れへん。そやきかい「久しぶりに飲もうやないか」と怪いジャブで呼び出したんや。みんなも覚えとき や。電話で重要な話は厳禁やからな。内容は相手と直接話すのがポイントや。

意気揚々と待ち合せ場所に着いたワシは、久しぶりにあたりめを見てビックリしてしもうた。元々、身長が180cmで体重が100kgほどの巨漢やった男や。それがガリガリ野郎になっとるやないけ。ところが胴だけは青白く、パンパンに張れあがっとおる。そうやな……、やせ細った身体で胴回青白のアンパンマンっちゅう感じや。

「おまえ、ほんまに、あたりめか?」

ワシは何度も確認したくらいや。とにかくワシ等は居酒屋の一角に陣取ると乾杯の後、近況の交換をしたんや。

なんでもあたりめの会社は衣料品製造業やけども、中国製品に押されて四苦八苦。その影響で給料は下がるし、子供の成長にともなって教育費は上がるしで、生活苦に突入しているらしい。

「間かんかったらよかった」

ワシは意気消沈してしもうた。回収モードに影がさし、気が滅入ってくると、腹具合まで悪うなってきおった。

「ワシ、ちょっとトイレに行ってくるわ」

ワシはあたりめに声をかけ、気分転換もかねてトイレに立ったんや。

便器に腰掛けると「フー」と、溜息が出たで。ワシは回収の方針が決まらんまま不慣れな洋式便座で気張ってたんや。やがて頑固者のクソを体外へ追い出したワシは排便後のお決まりの性業をこなそうとトイレットペーパーに手をかけた。ところが……や。カラカラカラ……。なんと、トイレットペーパーの芯だけが空しく空回りしよった。

ワシは焦ったで。トイレットペーパーが無いんや。外出先でのこの状況は、ファッションヘルスで楽しんでる最中に、大地震に遭った時と同じ位の衝撃や。

「どないしたろ……」

ワシは個室の中をキョロキョロと見渡したんや。するとある装置を見つけたんや。

「ウッキー。ウォシュレット付きやないか。最近の居酒屋はオシャレやのう」

早速ワシは笑顔で洗浄のボタンを押したんや。しかし、次の瞬間、冷水が股間をすり抜け飛び出してきよった。

「カズよ、落ち着け落ち着け。向きが悪かっただけや」

ワシはそう自分に言い聞かせると、肛門の位置をすこし前へ移動させて再チャレンジしたんや。しかし、今度は後頭部をかすめて噴水が舞い上がったんや。

「ひー!」

ワシは便器を覗き込んだ。体内から家出したクソと溜まった水が居座っとおる。

「どないなっとんねん?」

クソにブツブツいいながら噴射口の位置を調整していたら、溜まった水に何か顔が写っとる事に気がついたんや。

個室での怪現象 席に戻ると更に仰天の事実が!?

「……だ、誰や」

ワシはまわりをキョロキョロと見渡したんや。しかし、ワシ以外、個室には誰もおらへん。不思議な気分に包まれながら、もう一度便器の中を覗き込んだ時、ワシとは違う顔が写っておった。

「ワシは一瞬、便器相手にフルチンで構えたで。向こうも身構えたようやった。ワシは動転してケツも拭かず一気に排水のボタンを押したんや。

ジャバ――。勢いよく流れる水。しかし、しぶとくも"顔"は便器のフチにへばりつきながらしばらくもがきよった。

しかし、最新型便器の水流には勝たれへん。やがて断末魔の悲鳴をあげて流れていったんや。ワシは怖くなって自分のパンツでケツを素早く拭くと、そのパンツを備え付けのゴミ箱へ投げ捨て、トイレから飛び出したんや。

ワシはズボンのチャックに陰毛を数本挟んだまま席に着くと、あたりめに話しかけた。

「あのなー、今さっき、トイレで……」

ところがアイツは、壁に寄りかかって寝込んでいた。

「何やあたりめ、まだ大して飲んでないやんけ」

そういってあたりめの肩にふれようとした瞬間……、

「あ……あたりめ……。何でおまえがトイレットペーパーを持ってるねん」

何とあたりめは、トイレットペーパーをしっかりと抱きしめて眠っていた。

"あかなめ"ちゅう妖怪がおる。気弱になった人間の心の隙をねらうのが巧みな妖怪や。

カネを返したいけど返せないあたりめの心に取り憑いたんか……。ワシはなんやあたりめが可哀想になってきたわ。ワシはあたりめを寝かしたまま勘定を払って、スカスカの下半身で一人寂しく帰っていったんや。

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメディアに登場中の謎の大盗人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に「平将門首塚の謎」(ジーオー企画)等がある。

【あかなめ】(所蔵:川崎市市民ミュージアム)
浴室で他人の衣服を入れ替えて混乱させる癖を持っている。浴槽の垢を舐めたりする妖怪

2006年4月号

妖怪のような浪花のオッサンとオバハン

平成 東陽片岡・カズキ(KAZUKI)の 新・巷説百鬼夜行

巻ノ五 ぬらりひょん

ワシや。カズや。今回はワシの高校の同級生で〝富ちゃん〟ちゅう、ええかげんな男の話を聞いてえや。

富ちゃんは富原っていう名前なんやけど夢ばっかり大きい超ぐうたら小僧なんや。学生時代は喧嘩に強うなりたいからいうて〝実戦カラテ〟を習いよったんやけど、これが通信教育や。理由を聞いたら、「道場は汗臭いし美しくない。それに自由に練習出来へんやろ」と、ぬかしよる。すべからくこんな調子や。

おまけにこの男、「俺は上段回し蹴りで刃物を持ったヤクザを3人ぶちのめして女のコを助けたんや」ちゅう具合に自分の安易な夢と欲望を現実の出来事として口にする〝超妄想癖〟を持っとった。たまに居るやろ。こんな奴。だいたい一回も道場に行かんと〝通教〟でカラテが強うなったら苦労いらんわ。

その後、富ちゃんは高校を卒業すると就職もせんと「僕は自由が欲しいんや」いうて家出したらしいわ。以来、行方不明者や。

けど、昨年年末にワシが大阪の野宿生活者用シェルター(臨時夜間宿泊所)を取材した時、その富ちゃんとバッタリ再会したんや。

ひと通りの取材を終えてシェルターの入り口で缶コーヒーを飲んどったワシ。まわりは野宿生活者でごった返しとった。するとシェルターの中から「なんやこのガキ!」と、威勢のええ声が聞こえてきよった。ワシの野次馬本能は燃え上がり、本能的に声のするほうへ駆け寄ったんや。

「うひょ〜! やってる、やってる〜」

2人の男が口喧嘩しとった。で、なんと驚いたことにその1人が富ちゃんやったんや。ワシ、腰抜かしたで。

「この発ガン物質め。ここから出ていけ」

ジャージ姿の富ちゃんが相手を威勢良く罵倒しよった。言われた作業員風の中年のおっさんも、

「なんやと、この便所コオロギ」

と、一歩、間合いを詰め寄った。さあ、戦闘開始や。ワシは(通信教育、頑張れ)と思いながら騒動を見とった。

すると、富ちゃんは何を思ったのか、

「やるのんか。オモロイやんけ。そやけどちょっと待てや」

と、両手を広げ、相手を制止しよった。そして、おもむろに自分の前歯を2本、スポッと抜きよったんや。

すると富ちゃんは、

「差し歯やから折れたら困る。修理代、高いからな。おまえ弁償出来へんやろ」

と、いきなりその場に正座しよった。そして抜いた歯をポケット・ティッシュで丁寧に包み、ズボンのポケットに仕舞いよったんや。

そしてスックと立ち上がると、手にさげとった工事用の黄色いヘルメットを被って、

「どこからでもこんかい」

と、前歯2本が無い間抜け顔で、再び相手を威嚇したんや。流石にその場の空気はお笑い演芸場状態や。相手もアホらしゅうなって、

「アホ…か…この糞虫野郎」

と、富ちゃんに唾を吐けよった。これを見て、野次馬も大笑いしながら散会や。

富ちゃんが妖怪ぬらりひょんに見えてきたんや

(慰めやで…富ちゃん……。相手の気持ちはよう分かるわ。ワシは知り合いやとゆうだけで恥ずかしい)

ワシは野次馬に浸ぎり、コッソリとその場を去った。

で、問題の〝野宿生活者のテント強制撤去〟の日や。

ワシは意気込んで取材に行ったんや。そうしたらまたまた驚いたわ。またしても富ちゃんが居るやんけ。おまけに富ちゃんが市役所の職員と取っ組み合いを始めとおる。

「なかなかやるやんけ……」

ワシは一瞬、感動したで。ところがどういう訳か、富ちゃんは、味方のはずの野宿生活者のおっさんから石を投げられてるんや。おかげで富ちゃんの後頭部は血まみれや。一体どうなってるんや。ワシは1人のおっさんを捕まえてワケを聞いてみたんや。

「なんであの人は役所の人間からも野宿生活者のおっさんからも攻められてるねん」

「ああ、あいつか。あいつは野宿生活者の仲間には〝シェルターなんかに行ったら自由が無いぞ。規則で縛られて利益所と同じや。と行くのを止めつつ、市役所の職員には〝野宿生活者をまとめたるから、俺にシェルターで一番ええ部屋と三食よこせ〟と好待遇を要求してたんや。まあ、両天秤をかけてたんやな。それがこの騒動で職員と野宿生活者が同時に見われてバレてしもうたんや。今も必死に職員に救済を訴えとる。ほんまもんのアホやで……。ところで、あんた、あいつの知り合いか?」

ワシは思わず、

「違います。宇宙で一番遠い、他人です」

と、背筋を伸ばしてキッパリ否定してしもうた。罪悪感で一杯のワシは血まみれの富ちゃんを遠目で見たんや。すると…、顔れあがった顔面と、形の変わった後頭部の富ちゃんが、ぬらりひょんに見えてきた。ぬらりひょんは自由を求めて勝手気ままに生きている妖怪や。この妖怪の欠点はAにはBの悪口を言うヌラリクラリとして、ひょんな事を言うところや。富ちゃんはきっと学生時代からぬらりひょんと同居しとったんやな。

その後、富ちゃんの姿はこの大阪の公園やシェルターでは見かけ〜んようになった。

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメディアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に『平将門首塚の謎』(ジーオー企画)等がある。

【ぬらりひょん】(所蔵:川崎市市民ミュージアム)

「ぬらり」とは滑らか、捕らえどころがないという意味で「ひょん」とはひょんな事と言うように、思いもよらないという意味。これが合体してぬらりひょんとなった。自由を求めるのが無上の喜びだが、人の心理の隙をねらうのが巧みな妖怪。人々が忙しい夕方時、どこからともなく現われ、誰も居ない座敷に上がり込み、勝手にタバコやお茶など飲んだりする。

2006年3月号

平成 新・巷説百鬼夜行 巻ノ四 ひょうすべ

東陽片岡・カズキ KAZUKI の

妖怪のような浪花のオッサンとオバハン

ワシや。カズや。それは冬の寒い日の出来事やった。ワシは大阪の通天閣の下で、ホマレっちゅうおっさんと待ち合わせしてたんや。ご存じのとおり、通天閣ゆうたら関西の顔みたいな建物や。てっぺんにくっついとる帽子みたいな円柱のネオンは、世界でも珍しい「光」の天気予報なんや。白色が「晴れ」でオレンジ色が「曇り」。青やったら「雨」っちゅうわけや。気象台と通天閣のナイスコンビネーションや。ほんまか嘘かはしらんで。ワシかて死んだ爺に聞いた話やからな。

まあ、そんなことは、どおでもええわ。それより今から会うホマレっちゅうおっさんの事を一寸だけ聞いてえや。

ホマレは、元関西の大手企業の副社長やった人なんやけど、これがどうもイケ好かん奴っちゃねん。家業も継がずに就職して、のし上がった奴なんやけど、在職中は、権力をかさに、取引先から賄賂は貰うわ、若い女をいてこますわで、わやくちゃな奴やったんや。ほんま、悪いところばっかりが目立つ「イヤな奴の見本市」や。

おまけに「次期社長はワシや」が口癖で、ワシ等みたいな下請けの雑魚捕まえては自慢話の連続や。ワシの数多い知り合いや取引先の中で一番に嫌な奴やったんや。

ところが、ある日のことやった。いつもどおり、「今度の役員会の人選でワシが社長に就任するんや。ガハハハハ」

と、いつもの自慢話が始まったとき、ワシはホマレに良うない気を感じたんや。

何やしらんけど、ホマレの顔色は悪く、おまけに自慢話に威圧感があらへん。

(こいつ、社長にはなれへんな……)

ワシのカンピューターがそう答えをはじき出したんや。案の定、第六感はキンコンカンや。春の健康診断で見事に引っかかりよったんや。

病名は「胃癌」。それも末期らしいわ。余命半年を宣告されたホマレは依願退職しよった。

ところがや……このおっさん、何を考えとんのか退職金の数千万円を湯水の如く使い始めよったんや。おまけに口癖が「ワシは残された時間を楽しむんや」に変わっとる。

「ちょっとは身体に気ぃ使わんと、奥さんやおばあちゃんが泣きよるで」

ワシは直球で注意をしたんや。しかし、返って来た答えは「彼女達には彼女達の人生がある」っちゅう、訳のわからん変化球やった。

その後、退職からそろそろ半年になろうかという頃や、大変な事が分かったんや。なんと、胃癌は誤診で、病名は単なる胃潰瘍やったらしい。医者から、

「良かったですね胃潰瘍で。早く直してお仕事頑張りましょう。まだまだお若いんですから」

と、笑顔でいわれた瞬間、ホマレは医者に飛びかかったそうや。

「ワシは会社を退職して、地位も名誉も女もカネも、全て失ったんや。ワシの人生を返せ」

とにかく凄かったらしいで。以来、ホマレはふさぎこんどるらしいわ。

何時間待っても オッサン来ない そしてその時…

そんな理由で、今日はワシが一文無しで家族にも愛想をつかされとるホマレを慰めようと、ここ通天閣の下で待ち合わせとったんや。

「それにしても遅いのう」

ワシはイライラして時計に目をやった。待ち合わせ時間はとっくに過ぎている。

「この寒空に立ちんぼさせやがって……」

ワシは段々むかついてきたんや、とその時やった。携帯電話が鳴ったんや。ホマレの家からや。ワシは、

「なんや、ホマレはん、待ってまっせ」

と、いうと、「ホマレの妻です」と、愛想つかして離婚しかけているホマレ夫人が電話に出よった。ほんで、ホマレ夫人がいうには、ホマレはこっちへ来る途中、凍った路面の氷に足を取られて転倒し、近くの病院に運ばれたらしいわ。ワシは急遽、病院に向かったんや。

ホマレは後頭部ぶつけてテンヤワンヤな症状らしい。病院に着くと、ワシは小声で「ホ・マ・レ・さーん」と、忍び足で病室に入ったんや。その瞬間、ワシは恐ろしい光景を観たんや。何と、ホマレが子供みたいに笑おとる。

「打ち所が悪かったんか」

ワシはあまりに惨めな悪人の末路に同情さえしたで。

そのときや。ワシにはホマレに子供の妖怪がしっかりと抱きついとる光景が確かに見えたんや。

「ひょう?……、ひょうすべ……やんけ」

ひょうすべ、〝氷(ひょう)すべり〟が〝ひょうすべ〟になった、氷の世界で生まれの子供の妖怪や。こいつは氷の世界で、しょっちゅう滑って転けとおる悪戯好きで正義感の強い妖怪なんや。なんでも恨みを残して霊界を彷徨う「菅原道真」から邪心を取り去って天神様にしたってゆうくらい純粋なガキや。

ワシはさとったで。ひょうすべはホマレの在職中の悪行が目に余り、職を取り上げ、退職後に汚れたカネを取り上げたんや。そして、最後の締めくくりが凍った道路で後頭部ぶつけて入院や。

聞くところによると、ホマレは、ホマレが継がなかったために妹夫婦が継いだ親の家業を手伝っているらしいわ。

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメデイアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に『平将門首塚の謎』(ジーオー企画)等がある。

【ひょうすべ】(所蔵:川崎市市民ミュージアム)
兵主部。九州に住むサルの妖怪で河童の一族ともいわれる。夏は水辺の妖怪で冬は山の妖怪と季節によって性質を変える妖怪である。

2006年2月号

平成 新・巷説百鬼夜行

巻ノ三 影女

東陽片岡・カズキ KAZUKI の

まさにこの世は妖怪だらけ…!?

ワシや。カズや。今日は大阪の「心斎橋」をうろついとるんや。商店街を抜けて道頓堀へ出てきたワシは小腹が空いたんで、宗右衛門町にあるたこ焼き屋に入ることにしたんや。当然やろ。大阪と言えば、たこ焼きや。たこ焼き食わんで何食うねん。

宗右衛門町は河と橋とグリコの看板がある有名な場所や。早速、ワシは一軒のたこ焼き屋のソースと油が染みついた暖簾をくぐったんや。

「はい、いらっしゃーい」

威勢のいい挨拶や。これが大阪や。ここには評判の「オバハン」がおってな、ウマイたこ焼きを焼いてくれるんで有名な店なんや。

そこは築30年位の6坪ほどの小さな店やったけど、2つのグループが客として先に席についとった。

ひとつのグループは作業服を着た40歳ぐらいの人相の悪いおっさん3人。たこ焼きをビールのつまみにしとった。

もうひとつのグループはピンクと赤の配色の派手なジャージの上下を着た20歳ぐらいの兄ちゃんふたり組で、ご飯とみそ汁付きの「たこ焼き定食」を食べとったんや。大阪の人間は「たこ焼き」「お好み焼き」「焼きそば」という「粉物」を、おかずに出来る幸せな人種なんや。関東の人が聞いたら腰抜かしよるで。

片隅の小さい席についたワシは評判のオバハンを探したが、どうも店内にはおらんようや。たこ焼きを焼いてる20代の若い店員に聞いても、

「さっきまで居てたんやけどな……」

と素っ気ない返事や。

「どこそこにおるやろうから、ゆっくり待たせてもらおか。なんせ、オバハンのたこ焼きを食べに来たんやさかいな」

ワシはのんびりと脇にあった雑誌を読み始めたんや。

と、その時や。怒鳴り声が店内中に響き渡ったんや。声の主は作業服姿のおっさんグループのひとりやった。

「おう、このたこ焼きにタコが入ってへんやないけ」

そう言って、たこ焼きを1個、店員にぶつけよった。ぶつけられた店員は、

「1個ぐらいタコが入ってへんからゆうて、ガタガタ言うな。このアホが!」

とやり返したから大変や。

「なにこら1っ。ほんだら、ワレ(あなた)、明日から『たこ焼き屋』の看板から『たこ』の文字消して『焼き屋』にしとかんかー1っ」

かなり酔いが回っている様子やった。しかし店員も負けてはいない。

「ほなら、おっさん。屋台のベビーカステラには赤ちゃんが入っとるんか」

と言って作業員風のおっさんに詰め寄ったんや。詰め寄られた作業員風のおっさんのひとりは完全に戦闘モードに突入や。飲み終わったビール瓶に手をかけ、振り上げた。

大体、喧嘩の原因なんか、こんなもんや。ワシは大変な騒ぎになるで、とワクワクしたんや。と、その時や……。

バーン。バーン

銃声が2発響いた。ワシはビックリして椅子から転がり落ちて床に伏せた。机の上の箸立てとソース入れがワシの頭の上にふってきよったわ。ばらまかれた箸とソースにまみれたまま、ワシはゆっくり周りを見渡したんや。

すると……、腰を抜かして座り込んでいる客と店員の兄ちゃんの前に右手でピストルを持ち、左手を腰に当て、立ちふさがっている仁王様を見たんや。いや、ようみると、仁王様やのうて、この店の名物オバハンやんけ。ワシは目が点になってしもうた。

仁王のようなオバハンが一瞬で泣き崩れる老女に

オバハンはドスの利いた声で座り込んでいる店員と作業員風の客にこう言うたんや。

「誰の店や思うてんねん」

女だてらに、ええ気っ風や。ワシは頭から垂れてくるソースをペロッと舐めながら、このオバハンに惚れ込んでしもうたんや。しかし、事態はより深刻になってきよった。銃声を聞きつけた警官ふたりが直ぐに店内へ飛び込んできたんや。おまけに店の前には野次馬が集まりだしたんや。

「どうしました。銃声が聞こえましたよ」

若い警官が険しい表情で店内の人間に問い詰めたんや。

「怪我人はいますか」

残りの老警官も周りを見渡しながら様子を探る。

「可哀想に、このオバハンも、銃刀法不法所持で逮捕やで」

立ち上がり、ワシは顔や服についたソースをおしぼりで拭きながら「オバハン」をチラッと観たんや。そしてワシはあっけにとられた。なんと、そこには仁王様から変身した、泣き崩れるか弱き老女がおったからや。おまけに不思議なことに、さっきまでオバハンの右手に握られていたピストルは何故か座り込んでいる店員の右手に収まっとる。

「なっ、なんでや……」

ワシは思わず呟いたとき、泣き崩れるオバハンから「黙っとかんかい」と言わんばかりの恐ろしい視線がワシと客に送られていた。

ワシらは沈黙を守った。

泣き崩れる老女は野次馬や警官に取り乱した様を大きく装い「怖かったでー」と同情を求めていた。無線で駆けつけた10数名の警官に連れられ、ピストルを持たされた店員は、手錠を掛けられうなだれたまま店を後にしたんや。

警官に伴われて店を出る際、店員は一瞬、目線をオバハンに向けた。目線を向けられたオバハンは、きっぱりとした目線を店員に返した。

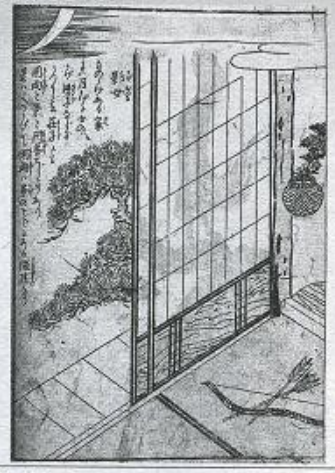
「姐さん。行って来ますわ」

「気張っておいでや」

ふたりの目線からワシは無言の会話が聞き取れた。

「カゲ女」っちゅう妖怪がおる。濡んだ街や家に影になって現われる妖怪や。そこに住む人間の欲望や悲しみを襖や壁に影になって映し出す悲しい女や。この街に残ったいろんな人間の想い出や悲しみが此処に憑きよったんや……。

【影女】(所蔵:川崎市市民ミュージアム)
濡んだ街や家に影になって現われる。そこに住む人間たちの欲望や悲しみ、心の内に秘めた憎しみが襖や壁に女の影の形になってシミのように浮き出てくるという。



東陽片岡(漫画)プロフィール
漫画家。昭和33年、板橋区生まれ。主な作品に「されどワタシの人生」(青林工藝社)、「お三十路の町」(小学館)などがある。漫画サンデーにて「煩悩劇場」連載中。

KAZUKI(文)プロフィール
ゴッドプロデューサーとして様々なメデイアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に『平将門首塚の謎』(ジーオー企画)等がある。

2006年1月号

平成 新・巷説百鬼夜行

東陽片岡・カズキのKAZUKI

巻ノ二 青女房

その日、ワシは発情した。せやから大阪のとある遊郭をうろつく事にしたんや。

そしてワシは一軒の暖簾をくぐったんやが、それが、不幸の始まりやった。

そこの店は「顔見せ」があらへんかった。せやけど、入り口でやり手婆が、

「兄さん。あんたはついてるで。今日の町子さんはとびっきりの器量好しや。普段は指名が一杯で、一見さんには高嶺の花や。ところが今日はポッカリと、キャンセルが出てな。ラッキーやで兄さん」

と、口をモゴモゴ動かしながら上機嫌でワシの袖を引いたんや。大体、この手の婆の話が本当だった試しは無い。ワシを二階へ案内した婆は、

「町子さんを呼んでくるからね。ところで飲み物はコーラ? それともビール?」

婆はワシの顔の

まさにこの世は妖怪だらけ…!?

20㌢まで皺クチャ顔を近づけて、愛想笑いをしながら問いかけた。

「コーラでええわ」

とワシが答えると、

「町子さんには精一杯サービスさせるわ。それから時間は30分コースでええね?」

そう言い終わると、

「ま・ち・こ・さーん」

と、お勧めの婆の名を呼びながら階段を下りていった。

と、そのすぐ後、下の方でドスンという音がした。多分、さっきの婆が階段を踏み外したのだろう。恐ろしい店だ。

5分ほどして、階段を登ってくる足音がした。その足音は次第に近づき、ワシの部屋の前で止まった。

「町子です」

やって着たんは年齢が50代後半の小柄な婆やった。町子は下着無しでスケスケのピンクのネグリジェ着とった。ワシは一瞬腰を抜かしそうになった。

「お客さん。名前は何て言わはるの?」

「カズ。カズって言うんや」

町子は恐ろしく汚いガラスコップに注がれたコーラをワシに勧めた。ワシは口紅の後が無いところを必死に探し、恐る恐る口を付けた。

「あーあ。私もカズちゃんみたいに、ええ男と遇りあっとったらこんな人生歩まんでもよかったんや」

と、町子は天井を見上げて勝手にしゃべり始めた。

「私ね。昔、心から尽くした男がおってん。ほんでその男に、身も心も捧げたんや。ほんま、あのときの私はけなげなええ女やったわ。ところがその男がどうしようもない男やってん。見てくれる?」

そう言って両手で自分の口の左側を引っ張ったんや。そこでワシはおぞましい物を見てしもうた。左側の上歯が糸切り歯から奥歯まで無いんや。おまけに歯茎が膨らんどる。町子はホレッと言わんばかりに歯のない口をワシの顔に近づけた。

「なっ。歯が無いやろ。これな、男に毎日どつかれて無くなってしもうたんよ」

目に涙を浮かべ始めた町子。そして涙混じりの声で、

「女に手かける男なんか最低や。そやけど惚れてしもた私も悪いんよ」

と言って、ついには顔を伏せて泣き出したんや。

さらに今度は乳房の垂れ下がった右胸をいきなり晒し、

「ここに傷があるやろ。これもな、男に蹴られて折れたんよ。3本やで」

と言って持ってきた汚らしいガラスコップのコーラをグイッと飲み干した。さらに、

【青女房】（所蔵：東北大学附属図書館）

夫に先立たれ、ぼろぼろの家に1人で暮らし。ただ昔の思い出に執着し、帰るはずもない夫の帰りを待ち、女としてのたしなみの化粧を丹念にするも、その顔は般若のごとし。生きる妖怪と化す。

東陽片岡プロフィール（漫画）

漫画家。昭和33年、板橋区生まれ。主な作品に「されどワタシの人生」（青林工藝社）、「お三十路の町」（小学館）などがある。漫画サンデーにて「煩悩劇場」連載中。

KAZUKIプロフィール（文）

ゴッドプロデューサーとして様々なメディアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に「平将門首塚の謎」（ジーオー企画）等がある。

「私ね。惚れた男に純潔を捧げようと此処に墨入れたんよ。まだ20代の小娘の頃や」

と、中腰になって、今度は左の太股の内側の付け根をワシに見せ始めた。

ワシは目を背けそうになったんやけど、町子はホレッ、ホレッと腰を突き出す。そこには般若の入れ墨が有った。その直ぐ横には奇妙なたわしのように、堅そうな大きな毛玉が有ったんや。ワシは吐く寸前やった。町子はおかまいなしに延々と言葉を続けた。

「これ見たら…、そう。もし、私を襲うとする男がこれを見たら絶対嫌がるやろ。ほんだら愛する人に対して純潔が守れるやん。そう思って入れたんよ。ところが つき合ってた男まで嫌がってしもーて……。私ってあほやね」

「それは…〝あほ〟やで」

ついにワシはそう言い放ってしもーた。

妖怪婆の猛攻に抵抗もできず! 遊郭の個室内は地獄絵図に……

「カズちゃんまでそんなこと言うん? なあ、怖ないで。抱いて。私、生理はとっくにあがってるさかいに避妊せんでええよ。早よう抱いてみて」

と、何かに取り憑かれたようにワシを押し倒し、上にまたがってきたんや。

「ヒー、お、オタスケッ!」

その瞬間、天から救いの声がかかったんや。

「町子さーん。時間よー」

やり手婆の声やった。

「はーい」

と、さっきまでとはうって変わって明るい返事。

「また、遊びに来てや」

そう言って町子は部屋を出ていったんや。こうしてワシの恐怖の体験は終了した。

2週間後、ワシは雑誌社にコラムの原稿を持っていったんや。ロビーには数人の編集者や記者がたむろしてた。結構、こういう場所でネタは拾えるもんや。ワシは聞き耳を立てて周りの話を聞いていたんや。そうしたら、

「例の遊郭に恐ろしい怪物婆がおるらしいのお」

「知っとる、歯槽膿漏の婆やろ。豊乳の美容整形が失敗したくせに歯も胸も男に殴られたとか、嘘言う婆や」

「ほんでも偉いよな。入れ墨のシールを股に張って男をあおったり。あげくに一回も行為させんとカネ取るんやろ」

「数こなすのに体力もたんからしいわ。偉いやっちゃ」

「ほんでも、そんな婆にだまされるアホの顔が見たいもんや。ハハハハハ」

ワシは「そのアホがここに一人おるがな」。そう呟きその場を後にした。

2005年12月号

平成 新・巷説百鬼夜行

東陽片岡・カズキ(KAZUKI)の

巻ノ一 狸

ワシが銭湯へ行ったときのことや。

ワシは下駄箱にスリッパを入れると早速番台で料金を払って中へ入った。壁には「2月6日は風呂の日」と書かれたポスターがこの時期になっても張ったままやった。

料金表は中学生以上の「大人」から小学生の「中人」、そして0歳から幼稚園児までの「小人」に分かれている。

「洗髪」と書いてあるのは頭を洗う場合、支払うおカネや。10円程やが、たいがい洗うさかいに必要になるんや。もっとも洗髪料として料金をとっとるのは大阪府、佐賀県、沖縄県だけらしい。ほんまか嘘かは知らん。ワシも死んだジジイに聞いた話やからな。

この時間帯の入浴者は爺様がふたり。天井の小窓から差し込んで来る日差しが湯船の湯にあたり、キラキラと光り、まるでワシは王様になったような心持ちや。

「たまにはこんなリフレッシュもええやんか。明日からのビジネスもうまく行く気がしてきたわ」

2～3分も湯船に浸かってると身体がホコホコしてきよる。王様気分のワシは首まで湯に深く浸かり、両手を前で組んで、思いっきり湯船で背伸びをしようとした。

そのとき……。

ボッシャーン!

鈍い音が湯船の端で聞こえた。

「何や?」

まさにこの世は妖怪だらけ…!?

ワシは辺りを見渡した。しかし、何も発見できなかった。周りではひとりの爺様は頭を洗っていた。もうひとりの爺様も身体を洗っている。怪しい行動をとっている人物は見あたらない。

何やったんや、と肩まで湯に浸かりながらキョロキョロするワシの右手に何かが触れた。

「何や、このニュートラルな感覚……」

ワシは湯船の中に沈んでいる、不思議な物体を右手でそっとすくい上げた。そして、その物体の正体を確かめた。

「なんやねん、これ?」

それは黒っぽい緑色をした柔らかそうな物体やった。

「フンフン。なんか微かに臭うぞ」

ワシの鋭い臭覚が異常を察知したその瞬間、ワシはその物体の正体を見切ったんや。

「うん……こ。そや、うんこや」

ワシはうんこに湯船のコーナーまで追いつめられてしもうた。やむなく左手でそっとうんこを向こうへやろうと押し出すと、そのうんこの一部が恨めしそうに崩れだした。

ワシは焦った。まるで水死体がこちらを睨みつけているようやった。

うんこは人体から放出されるとドンドンとその体温を下げて行く。しかし、お湯に浸かったこのうんこは温度が下がらない。

「このままでは死亡推定時刻が狂ってしまうやんけ」

ワシは意味不明な発想を巡らせ打開案を模索した。

「周りには怪しい奴は誰も居ない。という事はこのうんこの出身地は女湯や。

しかし、この状態は最悪や。もし、他人が浴室に入って来たり、身体や頭を洗っている爺様がこの湯船に入ったら、これはワシのうんこと間違われる。

そうなるとワシの地位も名誉も一瞬のうちに消え去って、うんこ野郎という汚名だけが残ってしまうやんけ。まずい。これは、まずいぞ」

そう思ったワシは決心を固めた。そして、そのうんこをそっとすくい、今や懐かしの名作漫画『巨人の星』の星飛雄馬になった気分で、女湯めがけて投げつけたんや。

「大リーグボール4号　臭う魔球!」

うんこは弧を描き生まれ故郷の女湯に飛んでいった。

女湯は地獄絵図 男湯は三すくみ 古狸は咆哮し、化けの皮が……

数秒後。女湯から恐ろしい悲鳴が聞こえた。

「キャーッ。うんこよ～」

その悲鳴は空襲警報のように数十秒つづいた。そして、番台からおっさんが男湯に飛び込んで来た。

「誰や。うんこを女湯に投げ込んだ奴は?」

ワシはうんこの汁が残った湯船に顔を沈め、深く身を隠した。

ワシは完全に潜水。哀れにもその場に取り残されてしまった爺様ふたり。疑いはこのふたりの爺様にかけられた。

男風呂は風呂屋のおっさんと爺様ふたりの三すくみ状態。気まずいムードに包まれたその瞬間、おっさんはブツブツ言いながら番台に戻っていった。

騒ぎも一段落ついて身体を拭き、番台横でフルーツ牛乳を飲むワシの耳に女湯の脱衣場の会話が聞こえてきた。

「誰かしら。非常識な男は?」

「そうよ。うんこを投げるなんて最低な人間や」

「うちの清ちゃんなんか、ビックリして…今も情緒不安定が続いているんよ」

そんな、ワシを責める会話が続く中、居ても立ってもおれんようになったワシはひと言かましたろうとしたその時や、狸ような叔母はんが会話へ割り込んできたんや。

「犯人探すの、簡単やで」

古狸は得意げに話始めた。

「さっきのうんこは緑がかってたやろ。あれは赤ちゃんのうんこや。

それも離乳食を食べて日の浅い子のうんこや。そやから男湯で赤ちゃん連れてるおっさんが犯人や」

ワシは、

「赤ちゃん連れのおっさんなんか居るかい。それどころか赤ちゃん連れは女湯にようさん居とるやんけ」

と古狸にいってのけた。

ものもいわずそそくさと銭湯を去っていく子連れのメス狸たち……。

その後、その銭湯の壁にはかれたポスターがはがされ、代わりに「浴室でうんこをしたり、投げたりしないでください」と書かれた張り紙が張られていた。

狸【所蔵：川崎市市民ミュージアム】

東陽片岡プロフィール（漫画）
漫画家。昭和33年、板橋区生まれ。主な作品に「されどワタシの人生」（青林工藝社）、「お三十路の町」（小学館）などがある。漫画サンデーにて「煩悩劇場」連載中。

KAZUKIプロフィール（文）
ゴッドプロデューサーとして様々なメディアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力を使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。